

大平原の釣り

二〇年ほど前、モンゴルを初めて旅した時のことだ。大草原の中を静かに川が流れていて、カヌーの上からルアーを投げると三〇〜五〇センチの魚がよく釣れた。レノックと現地地と呼ばれているサケ科の魚だ。初めて訪ねる国で魚を釣る時は、なんとなく期待で胸が躍る。日本のフナ釣りのような仕掛けを投げると入れ食いになり、ぼくはすぐに飽きた。川は澄んでおり、釣れた魚は臭くなく、焼くだけで食べるのができた。

モンゴルの国旗には魚の図柄が描いてある。モンゴルでは魚は神の使いであって、人々は魚を食べる習慣がない。地元の人たちがやってきて、釣りをするぼくを珍しそうに眺めている。竿を貸してやると、ルアーで簡単にかかると驚いていた。ここには釣りという遊びがまだないようである。

川の畔にテントを張り、一日釣りをした。日が暮れると、川の浅瀬にタイメンが出てくる。八〇センチ前後のタイメンを釣った。大きいだけでニジマスのような美しさはない。ぼくとしては、二〇センチ前後のハヤに似た魚をたくさん釣ったのが面白かった。

翌朝テントを出ると、一人の男が馬に乗り、野生の馬の群れを追っていた。モンゴルの遊牧民は竹

野田知佑

プロフィール
1938年生まれ、熊本県出身。カヌーイスト、作家。国内外の川をカヌーで旅し、川と人の暮らしの繋がりを伝え、環境破壊について警鐘を鳴らす。1982年、『日本の川を旅する』（日本交通公社出版事業局）で日本ノンフィクション賞新人賞受賞。徳島・吉野川で子どもたちに川遊びを教える「川の学校」校長を務めている。著書に、『ナイル川を下つてみないか（ヘイチユアエンタープライズ）他。

竿につけた縄の先を輪にし、それを投げて馬の首にかけて捕まえる。朝霧が立ちこめた平原を、幾つもの馬の影が駆けていった。

カヌーにキャンプ道具を積みこんで出発。

子供たちが馬に乗ってやってきた。ぼくがカヌーを漕ぎだすと、彼らも馬に乗ったまま川に入り、水音を立ててフネの横を駆けた。半日カヌーと並走し、子供たちは手を振って帰っていった。

草原の中に遊牧民のゲルがポツポツと見える。「サンバイノ（こんには）」と声を掛けると、家主が乳茶を入れたヤカンと茶碗を持ってきてもてなしてくれた。牛やヤクの乳に水と塩を加えて沸かし、茶葉を煮だしたものだ。乾燥した空気の中を漕いできたので、酸味と塩気のきいた温かい乳茶が身に染みた。言葉が通じないため、ただ顔を見合わせてニヤニヤするだけである。

夕方岸に立ち、ネズミ形のルアーを投げこみイトウを狙った。ぐいっと竿がしなるが、すぐに糸を切られてしまった。カナダ製のシャモジのようなルアーをつけて、再度竿を振る。大きなアタリがあり、ゆっくりと引き寄せた。九〇センチのイトウだ。タモ網で上げると魚が頭を二振りし、五号のラインがプツリと切れた。

月刊 みんなぱく

5月号目次

1	エッセイ 千字文 大平原の釣り 野田 知佑	12	みんなぱく Information
	特集 釣り	14	世界のバスケットリー×バスケットリーの世界 鵜の運搬籠 卯田 宗平
2	釣り人と人、魚 秋道 智彌	16	みんなぱく回遊 オンライン展示の条件 伊藤 敦規
4	沖縄のカツオ一本釣漁と餌の獲得 吉村 健司	18	シネ倶楽部 M グローバル経済と闘う女性たち ——「メイド・イン・バングラデシュ」 南出 和余
5	街場の釣り堀、この小粋なるもの 木名瀬 高嗣	20	ことばの迷い道 「わたしこそ、ありがとう」 岡本 真理
7	溪流の魚と人 樫永 真佐夫	21	次号予告・編集後記
8	中国における釣りの歴史 塚田 誠之		
10	〇〇してみました世界のフィールド メキシコから広がる音楽と宴 増田 耕平		